

雪国

映画文学人生論

原作：川端康成（1935-49）「文藝春秋」他）
監督：豊田四郎（1957） 大庭秀雄（1965）
出演：島村 池部良 木村功
駒子 岸恵子 岩下志麻
葉子 八千草薫 加賀まり子
踊りの師匠 三好栄子 沢村貞子

国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた

日本人作家として初めてノーベル文学賞を受賞したのは川端康成、受賞対象作品は『雪国』である。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。夜の底が白くなった」という冒頭の文章はよく知られている。

ノーベル文学賞の審査員は、「日本人の心情の本質を描いた、非常に繊細な表現による卓抜さ」をみとめ、受賞理由とした。

もつとも、受賞にはサイデンステッカーの英訳が貢献したともいわれている。川端自身が「ノーベル賞の半分は、サイデンステッカー教授のものだ」として、賞金も半分渡したという。

冒頭の文章の英訳とその重訳を紹介しておく。

The train came out of the long tunnel into
the snow country. The earth lay white under
the night sky.

（汽車は長いトンネルを抜け雪国に出た。大地は夜空の下で白く横たわっていた）。

英訳では汽車と大地が主語となっているが、原文では主語が省略されている。これは日本語の特徴で川端康成の文章にかぎったことではない。新感覚派の作家による「非常に繊細な表現」とは、たとえば、「夜の底が白くなった」というような



雪国——映画文学人生論

新感覚の表現ではないかと思う。

しかし、『雪国』が日本人の心情の本質を描いた作品とは思えない。たとえば、主人公の島村をフーテンの寅さんと比較して、どちらが日本人の心情の本質を描いているか。

島村と寅さんはどちらも遊びながら暮らしている男のように見えるが、島村には親譲りの財産があるのに寅さんには財産などはない。島村は素人芸者の駒子にもてているのに、寅さんはふられてばかり。実らぬ恋をあきらめ、黙って立ち去る寅さんからみれば、『雪国』はキザな男のノロケ話を描いたエロ小説の類ではなからうか。

島村には「男はつらいよ」という庶民の心情が感じられない。たとえば、大庭秀雄監督の映画では、島村役の木村功が罪の深さを感じているが、原作の島村には罪の意識などはない。そんな意識はあったとしても省略されている。

豊田四郎監督の映画では、時代の背景として日中戦争への言及があるが、原作では戦争は影を落としていない。島村と駒子の心中未遂や駒子、葉子との三角関係のもつれも原作にはない。

『雪国』という小説の凄さは、作者にとって過剰なものすべて省略した「省筆」の感覚なのかもしれないのだが、映画は原作にない説明を加えて観客を感動させようとしている。

トンネルを抜けると雪国雪女